



Title	似雲法師の生涯
Author(s)	一箭, 喜美子
Citation	懷徳. 1961, 32, p. 50-70
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90361
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

似雲法師の生涯

一 箭 喜 美 子

今西行と呼ばれた歌僧似雲法師の生涯を考えてみる時、まず心をひかれることは、その歌と相即して似雲の生涯をつらぬいて流れている西行への思慕の深さであり、更にはその深き思慕のころのままに西行と同じく諸國行脚と詠歌とに徹したことである。西行と似雲、この二人の間にはもちろん時代・境遇・資質の相違はあるが、西行の偉大さと共に、似雲の生き方自體が尊重さるべきものと思われぬ。

似雲をしてかくのごとき生き方をなさしめたものは何であつたか、これについては似雲の生い立ちをみなければならないが(詳しくは後述)、八歳の時に母に死別した事が大きい影響を與えているのである。三十九歳という若さでこの世を去つた彼の母は常にやまと歌を愛し佛教の

信仰篤き人であつた。亡き母を慕つてやまなかつた少年の日の彼は、その母の志をつぐことにより母の菩提を弔おうと願つたのであつたが、それは即ち歌の道を學ぶことと、佛道に入ることであつた。ここに早くも彼の生涯を貫く深きところが看取されるのであるが、この二つが實踐にうつされたのは三十六歳の時であつた。これはやや遲きにすぎるかとも思われるのであるが、彼自ら記すところによれば、それまで四たびも父に出家を懇願したのであつたけれども父は涙を流してそれを許さなかつたのである。その父も似雲の二十九歳の時なくなり、その七回忌をすませた似雲はかねての思い通り出家を遂げ、翌年京へ上り當時の歌壇の巨匠武者小路實陰のもとに入門した。似雲はそれ以後歌・佛兩道の修行に勵んだ。それは今は亡き母追善の日を送ることもあつたのである。彼がそれほど慕わしく思つている母の命日、二月十六日

は奇しくも、

ねがはくは花の下にて春死なむそのきさらぎの望月の頃

と歌つて二月十六日に亡くなつた西行法師の忌日と同じ日であつた。彼はこの奇しき因縁を深くよろこんだのであろう。二十三歳の若さで突然出家した西行——その命日に、歌に心をよせ信仰の深かつたわが敬慕する母もこの世を去つたのだ。この奇縁に心を打たれた似雲の西行思慕の生活がここに始まるのである。母への追慕追善の心が西行思慕の心と一致したところに似雲の生涯を貫くところを察すべき根本の眼目があろう。また、ここに彼の生き方の純粹性の祕密があるとも言えようか。彼は

西行に姿ばかりは似たれども心は雪とすみ染のそでと詠んでいるが、ともかく彼はこの奇しき因縁を深く感得し、自然を心の友として旅に生きた西行の足跡を求めて諸國行脚の旅に出たのである。すみ染の衣を着て旅をし歌を詠む、そういう姿だけは西行と似ているが、西行の心と自分の心とをくらぶれば、雪と墨のようにちがうと歌つているのである。しかしこれはもちろん謙讓の氣持で詠んでいるわけで、彼自身西行の姿だけではなく、その心を己が心とし旅を続け歌を詠んだ。そして彼の西行思慕の生涯に於て最も感激的な事件は、彼が六十歳の時

長く探し求めていた西行の墓を、石山寺に七日七夜參籠し、觀音菩薩の靈示を得て河内の弘川寺に發見したものである。

尋ねえて袖になみだのかかるかな弘川寺にのこるふ
るつか

西行塚を發見した時、彼は地に身をなげうち涙にむせかえつたと自ら記しているが、その感激はまことに胸に迫るものがある。彼は晩年この弘川寺に多く住み櫻の樹を千本植えて、

ほとけには櫻の花をたてまつれ我が後の世を人どぶ
らはば

との西行の遺詠のころを實踐したが、遺言して西行法師の墳に侍するが如き位置に葬られた。彼歿して今（昭和三十六年）に至るまで二百八年、西行思慕の誠、西行と相離れざるころを我々に如實に示しているのである。

さて似雲法師の歌はすべて「としなみ草」に記されている。「としなみ草」は似雲三十八歳の時に起筆し、七十六歳（八十一歳で歿）までの約四十年間の歲月をかけて、自分の著作（歌・紀行文・隨筆など）を自分自身で整理し書きついだ二十卷の自筆歌集であり、生活記録であり、自敘傳であり、「としなみ草」こそ彼の生涯の完結である。彼はそれを完成した翌年の西行の忌日、二月十六日に弘

川寺に奉納している。西行思慕へのひたすらな生活を送つた彼が、その生活記録を綴り終るにあつて西行の靈前にささげた彼の氣持も察することができよう。

彼の生涯を考察する資料としては「としなみ草」のほかに、似雲が最晩年の四、五年をすごし往生をとげたところである和泉（踞尾）の北村邸の常樂庵や、郷里の廣島の生家などに、書簡等いくらか残つていているというが、しかし根本資料としては「としなみ草」で十分足りよう。右に似雲の生き方を概観しただけでもわかるように、「としなみ草」の中に收められている歌・紀行文・隨筆などは、彼の生涯をとらえる資料となりうるのであつて、以下「としなみ草」（弘川寺・土橋眞吉共編、昭和十八年發行・全國書房）を資料としてその歌や文章によつて彼の生涯をやや考へてみたいと思う。四千五百餘首という歌數に比して歌人としての彼の價值は日本文學史上あまり高く評價されてはいないが、その至純にして徹底した生き方は我々を感動させるものがあり、その生涯にこもるところはいよいよ精しく考察さるべきであると思うのである。似雲の生き方を知るためにはその歌を、歌を理解するためにはその生涯を……この二つの相關關係に於てとらねばならないのであるが、本論では特に似雲の生涯という側を主として考へてゆきたい。

二

彼の生涯は三十六歳の出家という一事をもつて大きく二期にわけることができる。即ち

第一期 在俗の生活（一歳～三十六歳）

第二期 出家の生活（三十六歳～八十一歳）

右の二つの時期（特に第二期は更に細かく分けて考察しなければならぬのであるが）、のうち先ず第一期について述べてみよう。

似雲は寛文十三年（西曆一六七三年）一月二日、廣島で、酒造を營むかなり裕福な商家に生まれた。彼が幼い時にいかなる教育をうけ、どのような生活を送つたか具體的にはわからないが、「としなみ草」卷第二十に收録されている「思出草」という彼の自敘傳ともいふべき文を讀むと、

とをのとし大學をよみならひし時、大學章句の終りとよみをはりて、げにはじめあれば何事もをはりあり、われ今幼年なれどもつゝには命終るべしとしきりにかなしくて、此時發心きざししかど其後もわらはあそびにこころをとられて忘れがちにすぎつれど、又折ふしには彼終の一字、つと思ひいづることやまざりき。

右によれば十歳にして「大學」の素讀をうけているのであるが、このことから相當教養ある環境に育つたということが察せられるのである。そして注意しなければならぬことは、大學章句をよみ終つた時「終」とあつたその一字のことばに十歳の子供ながら強く心をひかれてゐるということである。「げにはじめあれば何事もをはりあり、われ今幼年なれどもつゝには命終るべし」こういう「命終る」とか、「死」とかいう人生の無常を幼くして考えたについては、彼が八歳にして母を失うという悲しい體驗を持つていたことが考えられるのである。彼の母は三十九歳でなくなつたのであるが、この母の死という精神的打撃が十歳の彼をして、「われ今幼年なれどもつゝには命終るべし」としきりにかなしくて……」という感慨をおこさせたことは想像に難くないのであつて、このことは彼が豊かなる宗教的心情に恵まれた人であつたことを如實に示すものであらう。

而して序文で考察したごとく、彼が佛道に入り歌の道を修めんとしたのは若くして世を去つた悲母の志を代つてとげるためであつた。そのことは「思出草」に次のように記されている。

さてそれより年のそひ行まに、つくづくと思へば、
たらちめさきだちし時、いはけなうしてとばかりも

つかへしことなく、其面影もおもほえず、せめて母の心ざしをしりなば、それをだにつがまほしく人にとひききてはンべりしに、常に大和歌をこのみ、とし老なばいかにもして、都近き山陰に世をのがれかくれて心のままに月花をながめ、念佛となへつつしづかにをはりとげんとのころざしありとなん、されどよそぢに一とせたらぬ年のきざらぎ十六日に身まかりぬ、其程すぎていのちながくは、母も思ひしほいをとげ、われも親の姿心ざしをもしりてましものをと、したひかなしめどもさらにかひなし。

大學章句の「終」から、命終りし母のことを思い、いわけなき八歳のころとて、孝養を盡すこともなく先立つていつた母、その母の定かならぬ面影をしたつては、母を知れる人に在りし日の母の有様を尋ねきたところ、「平生、大和歌を好み、年をとつたら何とかして、都に近い山かげに遁世して心ゆくままに月や花を眺め念佛を唱えながら靜かに往生したい」というのが亡き母の志であつたと聞かされたのである。そしてその母は三十九歳の年で延寶八年二月十六日、日頃の志をとげることなく夭折したのであつた。

せんかたなきにのみし歌をと尋れども、在し世に
はいやりすてはンべらず、猶とかく求めとめぬれば

手馴しちいさき箱あり、是をひもときて明ぬれば我生しときのうぶかみほどのをを紙につつみて、其うへに寛文十三丑年正月二日巳ノ刻誕生すとしるし、二首の歌を水莖の跡に残せり、見るや涙にむせかへり、つと思ひあはすれば、人のいひしもげにたがはざりけり、かくしをきて、なき跡にのこしつる心ざし、我にも世をすてて歌よめとの親の恵み、親の守りならんと、一かたならず思ひつつ、しばしは夢かとなどられて、うつし心もはンべらず。

右の似雲自ら記すところによれば、彼は人の話だけでは物足らず戀しい母のおもかげを求めて、歌をこのんだというからせて詠みおかれし歌でもと探してみたけれども見つからない。その時母の手馴れし小さな箱を見つけたのである。ひもをといて明けてみると自分の産髪と臍の緒であつた。ていねいに紙につつみ、その上には「寛文十三丑年正月二日巳の刻誕生す」(この記事で似雲の生年月日がわかる)とかかれ、更に二首の歌が記されているではないか。「見るや涙にむせかへりつつ……」とあるが、なつかしい母の歌をよみ、その筆蹟を見て自分のへその緒を手にはらはらと感激の涙をこぼしている似雲の姿が髣髴と目にうかんでくる。この部分は彼が自身の生涯を綴つた「思出草」の中でも亡き母を慕う至情があふれてい

て最も印象的で感銘を深くさせられるところである。しかし残念なことにこの二首の歌は具體的にはわからない。^(註2)ここに母の志をつぐことによつて、幼なかつたゆえ十分に仕えることの出来なかつた亡き母の靈にせめてもの孝養をつくそうという念いが似雲の心に深く根をおろすのである。そして彼の生涯を深く貫く心情の祕密がここにあると知るのである。彼はなおも内奥の心情をこまごまと記している。

されどかくてのみやとは思ひおこして、いでや此心ざしは、つぎなんものをと、いとど世のわざうとましうなりぬれどわかかりし身のならひとて、つまをむかへよとすすむる人々おほかれどほだし求めなば、いかかはせんとかたくいなみけれどある時は色にそみ香にときめき、ひたぶるに心ひかるるかたなきにしもあらず、とすればかかり、かくすればこころみだれて、さながらさがにの糸のごとく世網まつひてとけがたかりしも、よしさばれとおもひきりて、四たび迄家を出なんとせしに、たらちちお涙を流しゆるし得ざれば心よはみてとし月ををくりしに、つゝに此おひ人も此世をさりはンべりぬ、父には年久しくつかへしかど、さらぬわかれのかなしさ、いづれかをろかならん、さりて後、七とせめぐりしりのり

わざなソいとなみすぐして、みそぢあまり六とせといふ、神無月立待月の夜、一衣一鉢の身となりて、又の年の春都にのぼりし嬉しさ、籠鳥出て雲に羽うつ心地なんしける。

右の文の終が即ち第一期の終であり、その出家が如何に嬉しかつたかは、「籠鳥出て雲に羽うつ心地なんしける」という言葉によつてよく察せられる。そして一筋に若き頃よりの願に向つてすすむのである。即ち第二期の出家の生活へと。その前にもう少し右に記された文によつて考えてみよう。右の文が第一期在俗の生活を知る上の唯一の面も最も確實な資料である。

彼は母の志をつがんとする念いが日増しに深まると共に、世俗的なことを厭う心が強くなつた。しかも酒造を営む富裕な商家の家業を繼ぐべく要請される身分である（系譜の上では二男であるが長男は早世した。）又、青年時代の

の「色にそみ香にときめく」心に強くひかれることもあり、彼の心は兩極にゆれることもあつた。（もつともこれは彼の敏感な反省の心より言われたものでもあつたろうが。）しかし、遂に心を決して世網のまといを斷ち切つて出家せんと志したが涙を流しての父の懇願によつて四たびまでも思いとどまつてゐる。ここに彼の善良な心情と苦衷を察することができよう。ついで彼は父の死に遭つた（元祿

十四年似雲二十九歳の時。）「父には年久しくつかへしかどさらぬわかれのかなしさいづれかをろかならん」と記しているが、孝心厚かりし彼の悲しみは察するに足るであらう。しかも彼は父の七回忌の追善法要を終えるまでは、あれほど願つていた出家を敢えてしなかつたところに、家業をうちずてることの出来ない立場であつたことを考へても彼の立派さをうかがえるのである。七年父の道と志とを改めなかつた彼は母に對しても父に對しても克く孝であつた人である。

彼の第一期の生涯についてあまり具體的に知ることは出来ないが右の如くその心情の祕奥を彼自身記した文章によつて知り得たことで十分満足すべきであらう。

三

次に第二期似雲の出家後の生活について考えてみよう。

「手向草」（「としなみ草」巻八註參照）によれば、

三十あまり六とせといふ神無月立待月の夜、ふさとあきのくに、いつくしま、光明院にて、一衣一鉢の身となりて、又のとしの春彌生のはじめつかた都にのぼりはンベリぬ。

とあるから、寶永五年十月十七日（三十六歳）故郷安藝國の嚴島の光明院（淨土宗）で得度をし、名を「如雲」と改

め翌年の春三月上京した。この「如雲」という法名を後に「似雲」と改めるのである。^(註3) いずれにしろ「如雲」「似雲」という命名にも彼の性格なり心情なりがよく反映されているように思う。

さて第一期で述べた通り籠の鳥が天空にはなれた如きよろこびを以て上京した彼であつたが、「思出草」の記述に依れば、彼は今より都に住んで志した道に進もうと思つたけれども現實に直面すれば色々な支障がおこつて心のままにならなかつた。いつそのことを都を出ようかと思つてはみたが、また歌の道の修業はやはり都でなければできぬと思ひかえしたり、あれこれと己が志の達成を願つて悶々の日をすごしていたところ、折から親切な某僧都のとりはからいにより、かの僧都の別業であつた小倉山麓の静かな草庵に住むことになる。「ここに身をかくしゐて時のいたるを待べし」という僧都のことば通り、都よりはこの僧都と風よりほかに誰も訪うものとなない庵でわびしい月日を送つていた。

やがて時が來り當時の歌壇の中心的人物であつた武者小路實陰卿のもとに入門することが出來たのである。似雲四十一歳の時である。その時の喜びを次のごとく記している。

佛神の御たすけ有けるにや、今の世の道の御堪能の

御許よりめされしこと、身のおもひでは是ぞはじめなりける、此御館に年ながくはンベリし比、さまざまの御道引御恵みの露、をき所もはンベらず嬉しさ有がたさ身にもあまり、袖にもつつみがたくはンベれど、外へもらすべき事にしもあらず。

武者小路實陰は後西院より古今傳授を、靈元院より勅點をうけ當時堂上に於ても最も重んじられた歌人である。

その實陰のもとにどうして似雲が入門することができたのか、ただ「佛神の御たすけ有けるにや」とのみあるだけでいかなる紹介者があつたのか判明しない。特に歌道というのは古い傳統があるだけに一流の歌人の許に入門するといふことはそうたやすくはかなえられないことだつたのにちがいない。それ故實陰の家に寄食し、歌を學ぶことが出来るようになった彼のうれしさいかばかりであつたかは想像に難くない。こうして似雲は實陰のおかげで歌の道を學び當時一流の歌人たちと交ることも出來た。第一期の考察により理解されるように出家をするのと、歌の道を學ぶことは、彼にとつては不離一如の關係にあり彼の意願であつたが、實陰もまた佛道と歌道との一體不離なるを教えたよき師であつた。^(註4)

師實陰と似雲との關係についても少し考察してみよう。^(註5)

武者小路家に寄食していたため「としなみ草」卷一（三十八歳から四十九歳八月頃までの歌を收録）には「武者小路家ニテ當座」という詞書のある歌が非常に多い。所が似雲四十九歳の二月七日、

武者小路大納言實陰卿六十歳の賀によりて奉る君ぞ見む梢のあまたに言の葉もさかふる松の千世をかさねて

と詠んだのを最後にそれ以後「としなみ草」には實陰が歿する年まで二十五年間、實陰という名はほとんど出てこない。わずかに二、三箇處似雲の思ひ出の中に語られているのみである。「思出草」にも、

……いささかのことにことよせてこゝをさりはんべりぬ。

とある。右の文の「こゝ」とは實陰卿の所を指すのであるが、似雲が武者小路家を辞去したのはいかなる理由によるか、はつきりしたことはわからない。ただ以上のことから推察できるのは似雲四十九歳の頃より西行思慕の氣持の昂まるままに彼は草庵に行脚にと自主的な生活を欲したためであらう。師から離れていつたのは決して冷淡になつたとか、意見が喰ひ違つたとかいうのではなくて似雲が師の庇護をはなれて獨自な道を歩み得るようになつたことを物語るものであらう。

似雲六十六歳の元文三年、實陰は七十七歳で亡くなつたが、恩師の死を聞いた似雲は嵯峨の草庵にこもり、御經を書寫し、南無阿彌陀佛を上につえて六百の歌を手向けた。以後一周忌、三回忌、七回忌にも追善法要を修し歌を手向けている。亡き親を慕つてやまなかつた孝子であつた彼は、亡き歌の師に對しても追慕の誠をつくしたよき弟子でもあつた。

四

前述の如く實陰の許をはなれて自らの道を進もうとした彼は信仰と歌との一體不離を行脚によつて實踐してゆくとした。そしてそこに西行への傾倒が深まるのであるが、その西行を慕う心はいづごろから強く彼の心を占めるようになったのか具體的にはわからない。「手向草」（母の五十回忌追善の一文、（註₁、註₂をも参照））によれば、母の忌日は「はからざるに」あの「花の下にて春死なん」と詠んだ西行の忌日と同じであつた。わが國や中國に古今世捨人は數多くいたけれども、自分はとりわけこの西行上人を年來「慕わしく」思つていたと述べているところから、彼の西行憧憬はかなり遠い昔から彼の心の底にひそんでいたものと思われる。その生涯が出家、歌、旅という心情において似ていることに自ら親近感を感じ全

ての點において先達として仰ぐ心が深かつたのであろう。そして今忌日の一致ということを知つた彼は母への思慕の情と共に西行憧憬の心を一段と高めたのである。このような氣持から五十七歳の二月十六日に自らの生葬を行つたのである。「沐浴して剃りし髪をふる里のゆかりのある人の許へつかはす」と共に西光庵主瑞巖和尚のすめにより「櫻の一木をうつし栽」え、その木のもとに落ち残つた髪をおさめて、

思はずも櫻一木をたれうへてわが後の世の春を見せける

と詠んだ。この歌は西行の「佛には櫻の花を……」の歌をふまえていることも明らかである。そして西行や母の追善と共に自分の一周忌や十三回忌をいとなむという有様であつた。彼は寶曆三年七月八日八十一歳を以て往生するが、どんなにかこの二月十六日という結縁の日に死なんと願つたことであらうか。彼のひたすら西行思慕の氣持の程がよく察せられ、心すでに母と西行の命日に死した彼の今後の生涯の純一無雜さを知ることができるのである。

西行の名は彼の行脚の生活の中に語られる。心も身も歌もその足跡にもすべての點に西行との一致を願つて旅に出た彼が、西行の足をとどめ歌を詠みし所に、彼もま

た己が足をとめ西行をしので歌をよんだのである。これが似雲の後半生の最も大切な點であるので、以下特に西行と關係のある歌を中心に彼の行脚の生活を見ていくことにしよう。それは似雲の深き心情にふれることに外ならないのであるから。

五

行脚の足跡は「としなみ草」の記述と歌によつて詳しく辿ることができる。「旅行せし思ひ出は、くにぐにを見めぐりし靈蹤古跡あまたにして今更かぞへ盡じがたし」(「思出草」)と言つてゐる如く、彼の足跡の全てを辿ることは紙數もゆるさないこととて、極めて頻繁に遊んでいる都より比較的近い場所、例えば吉野・高野・難波・石山・須磨・明石・和歌浦などについては特に重要な記事以外はここでは取りあげず、又かなり長い旅行についてもその足跡を簡単に記して西行思慕の心のよく現われた點を主として記すにとどめておきたい。

まず武者小路家を辭去したと推察される年(享保六年・四十九歳)の伊勢詣での旅である。九月九日に草庵(嵯峨の任有亭)を出、十月八日に歸つたので、「手をおりてかぞふれば旅行の日數凡そみそかになりぬ、よつて此まきをみづからみそか草といふ」と、彼はこの旅の記録を

「三十日草」(「としなみ草」巻二)と名づけた。「三十日草」の最初に、

享保六年九月九日

大神宮にまうでんと草庵を立出るとて

とあるからこの旅の目的は伊勢神宮参詣であつたことがわかる。伊勢は西行が世の動亂をながめつつしづかに住んだ所であつた。鈴鹿山を越える時、

西行上人鈴鹿山うき世をよそにと読み給ひしも
ここにこそと思ひ出て
ふりすてぬ心なりけりすずか山うき世をよその身の
類にて

と詠んだが西行の歌というのは、

世を連れて伊勢の方へまかりけるに鈴鹿山にて
鈴鹿山憂世をよそにふりすてていかになり行くわが
身なるらん

というのである。本歌である西行の歌の格調、高さには及ばぬようであるが、西行にすべてを倣わんと願つて而も謙虚な彼の心情が察せられるのである。十六日外宮、十七日内宮へ詣でたが丁度御祭(おほん)の行われる日であつたのでいつもとちがつて御階(みはし)のもとまで行つて間近く拜することができ「たふとしといふもさらなり」と感激している。二十三日津を出て「あづまぢにをもむかん」とした

が「風いとはげしくてすすむに心なし」とあきらめて歸途に着く。十月六日に彼はもろは山をすぎ、毘沙門堂に参詣し、その日「松貞尼のすまれし跡」をたずねている。松貞尼というのは似雲の母が幼なかつた時の友であつたが、「ここに世をのがれかくれて、常に大和歌をたのしみ座禪念佛しておこなひすましつ、しづかに終りを取りし人」であつた。年のころ六十歳と八十歳位に見える松貞尼の弟子が二人住んでいた。その中の一人もまた母の幼き頃の友であつて似雲はここで片時も忘れることの出来ない母の話をきき、再び母に會つたかのごときなつかしさに涙をこぼすのであつた。

こまやかにむかし物がたりせられしを打うなづ
きてきけばたらちめに又二たび相まみゆる心ち
して涙とどめがたし

えにしありてとへばこときけたらちめの昔の友のむ
かしがたりを

松貞尼のお書きなつたものを見たいと望むが以前京の人に貸したとかで「玉手の記」一巻しか残つていなかった。母の幼き折の友、しかも母の願いと全く同じ願いに生きた松貞尼のかき残した水莖の跡「くりかへし見るにふみのかきさま、歌の心ばへ哀れ浅からず」それを通して母を偲ぶ彼の切なる心を察することができよう。

伊勢詣でから歸つた彼はその翌年五十歳の春を迎えて「年頃思ひこし富士のやま見まほしく思ひ」二月の二十日すぎ草庵を出た。西行が富士に心をよせたことは有名であるが、似雲もかねてより富士を見たいと望んでいたのである。去年の旅と同じく鈴鹿山を越え三月十一日、四日市にてあるじとの物語に鶺鴒の話を書き「生をくるしめ物をころしをのがしばしのいのちをやしなふことよとその罪の程を思ひはかるもいと悲し」と鶺鴒つかいの罪の深さを歎き、更に西行法師が備前の國で、「たてそむるあみとるうらの釣竿は罪のなかにもすぐれたるかな」と詠まれたものなるほどと思われ、自分も幼い時釣して魚をたくさんとつたこと、くりかえし悲しく思うけれども今や致しかたがないと述べているが、彼の僧侶としての心、宗教的な思いがよくにじみ出たいい文である。舟で熱田に渡り八橋の跡をたずねては伊勢物語の昔をしのび、三月二十日二川の松原を行く時馬子に教えられて待望の富士の雄姿を仰いだ。

……是より雲のやうに白く見ゆるは富士の山なるをと指さしけるに、うれしくめかれせず、潮見坂へ行のぼり心しづかに眺望して

天地の時はしりけり雲の上に残るも霞むふじの白雪よしだを出て歸途につく。桑名のあるじ後藤悠見と共に

又伊勢に参るがその出立の時に、

伊勢にまうでんと出れば此子五ツ六ツばかりなりしが親の別れをおしみてしたひこしを、道の邊に咲きしすみれたんぼの花なソにて何くれとすかしなぐさめて立わかれ行とて

つれなさになりもやすらむずか路をふりすて出るけふの別れは……この歌は悠見の作……

ほんのしばらくの別れというだけでも子はこのように親をしたう。この有様を見た似雲は二十三歳の若さで突如官を辭し妻子を捨てて出家した西行（佐藤義清）のことを思い出した。

かりそめの旅のわかれだに、かかるは人のならひなりしを彼のりきよといひし人つまこをもかへり見ず、官家を出て身をば墨染の衣にやつし、鈴鹿山うき世をよそにふり捨てて、いかになり行我身なるらむと詠ぜられしこと思ひかへせば哀れともたふとしとも。

伊勢に参り、伊勢の海邊でほんの一瞬波の上に日の出前の富士を見ることができた。ここから吉野に入り、更に高野山では三か月ばかりをすごし、高野を下りてから南紀へと足をのばして十月八日、約七か月半ぶりに洛外の草庵に歸つた。

享保十一年五十四歳の時、三度目の伊勢詣でを果し、歸

りに養老の瀧、不破の關などをたずねているが今度は四十日餘りの短い旅であつた。その道中、岐阜で芭蕉が筆記したという十八樓へのぼり、芭蕉自筆の一軸をひもとき、こころみて、ここにのぞめば、かぎりなき山水、野村、よく水莖の跡にうつせり。

と記しているが、西行の心を深く理解した芭蕉（元祿七年五十一歳で歿・似雲二十二歳）に對する更にくわしい彼の感想をする由がないのは残念である。

享保十五年五十八歳の時、彼は東國行脚に出た。彼の生涯中一番大きい行脚である。彼の敬慕する西行は周知の如く二十六歳の時と六十九歳の時の二度も奥羽への大旅行を行つてゐるが、彼にとつてこの東國行脚は大きい夢であつたにちがいない。西行が六十九歳の老體で東國行脚を行つたに比べれば、似雲は十歳も若かつた。しかし若いといつてもはや五十八歳、たつた一人で都をはるかに離れた東國へ大行脚に出るには相當の決意を要したことを思う。彼は出立にあつて以前自分の生葬を行つてくれた洛西双岡^{なろびの}の西光庵主瑞巖和尚に宗旨證文（註8）を受けている。この證文には、「この僧、宗旨は淨土宗で、行脚の途中もし萬一の場合は死骸はどのようにお取置き下されても文句は云わない。」という旨が記されていて、これを見れば死に備へてのことだけに、彼

が強い覺悟、悲壯な決意をもつてこの大行脚に出たか推察することができよう。似雲は深く靜かな心の持ち主であつたが、その内奥には非常な覺悟を秘めていた人であることはこれまでの考察によつても十分に知り得ることである。さて彼はこの一年五か月にわたる大行脚の記録に「窓の明ぼの」と題したが、それは元旦の富士を見た時に詠んだ歌（後述）よりとつたのである。また、

元旦の富士のけしきを見まほしく思ひながら、年ごろいたづらに過はンべりしに、いまだ相まみえざりつる。並河先生は風流の老儒雅にて伊豆のみしまに富士見亭とて庵室をしつらひをかれしに、そこにまかりて彼ほいとげなばとげねなど有ければ……取物もとりあへず神無月十日あまりに洛西嵯峨の草庵を出で……。

と記していること等から、元旦の富士の麗姿を拜するというのが年來の希望であり、それがこの行脚の目的であつたと思われる。「窓の明ぼの」の最初に、

遠き所も出たつあし本^{もと}よりと、かろらかにすみのころもをきなし、うしろにはつつみもの前にせし袋には彌陀の尊號、ひぬな形の三衣、古今、伊勢物語、山家集、草庵集など、秋の田の硯に短冊とひらばかり……。

と東國行脚に携さえていつた品々をあげているが、西行の山家集が彼の袋の中に入つてゐたことは忘れてはならないことである。逢坂の關をこえいよいよ京とも別れねばならない時に、

はなれがたきは都なりけりとよまれしもげにさ
るものにて何となうみやこのかたに心ひかるる
やうに有しかば、是なむころのほだしなりけ
り、行めぐりなば都へも又いづべしと意ふこそ、
同じことながらよからめとおもひはソベリて其
心ばへを

立かへるころぞほだし命あらばまた都にもめぐり
行なむ

と詠んでいるが、西行の
歸りゆく人の心を思ふにもはなれがたきは都なりけ
り

という歌を思い出したのである。悲壯な決意を持つてい
ただけに、都を離れることにしきじみとした旅の哀愁を
感じ、ひとしお西行の心がしのばれたのであろう。潮見
坂では十年ばかり前にここに立つて初めて富士を見たそ
の面影を頭に描いて雲の中の富士の姿を暗中に模索した。

(十一月)
十九日の朝空のけしきしづかにはれて行ままた
小夜の中山になりければ命なりけりと有しこと

も身のうへにおもひしられて

立歸りまたもこゆべき命かはよはひふけゆく小夜の

中山

と詠んでるが、小夜の中山での次の西行の詠は有名であ
る。

年たけて又こゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中
山

また西行を慕つた者として芭蕉を思い浮かべる人も多い
ことと思うが芭蕉も

いのちなりわづかの笠の下すずみ

と詠んだ。こうして西行、芭蕉、似雲、三人の詠を並べ
てみると、芭蕉も似雲も追慕する西行の心を心とし深
い感懷をもつて句をよみ歌をよんでいることが察せられ
る。享保十六年五十九歳三嶋の富士見亭に初春の富士を
見た。

聞しよりも見るはまさりて心有けるすまゐ、千
秋のふじのみ雪をふくめる窓の曙にうれしく春
をむかへて

春にあふ身の思出はふじのねやゆきよりしらむ窓の
明ぼの

二月三日鳴立澤では、

人すみて哀もあさき澤水にしぎのみたちし昔をぞお

もふ

この歌は西行の有名な

心なき身にも哀はしられけり鳴たつ澤の秋の夕暮
の歌をふまえていることは明らかである。

鶴が岡八幡宮に詣でて

思ひいづればいにしへ此所にて西行上人時の武將に
見え給ひて白がねの猫を重くうけ軽くすて給ひしこ
と、まことに愛憎取捨をわすれて心に一點のかかづ
らひもなく、瀟洒たる風骨したふべし、うらやむべ
し。

白河の關を越え松島にては、

此間の風景うつさんとすれど筆かぎりあり、いはむ
とすれど口におどろを含めり、ただ松嶋やおじまと
いひてやみぬべし……。

また

時につけところにつけつつ人々の唐歌、大和歌すく
なからず、されどわがのは一首もつかざりけり、勝
景にのぞめばくちならずをさるといひしもげに
さるものになむ。

と記して似雲も松島の絶景に聲をのんでしまつた。西行
を慕つて奥羽地方に行脚した芭蕉・似雲の松島での感動
は細かに味えば興のつきないところである。

似雲法師の生涯

このように彼は西行の歌を本歌として西行の心に密着
した歌を隨所に詠んでいるのである。

六

次に西行塚の發見は彼の生涯においても最も忘れ難い
感激であつた。これについて彼は「圓位上人古墳記」(と
しなみ草」卷十六)を書いてゐる。

西行上人の舊跡くにぐにおほかれど、身まかり給
し所さだかならず、いかにもして尋えまほしく年比
思ひすぐしつるに、或人並河奈號五郎のいひけるは上
人終焉の地は河内の國石川郡弘川寺とふるきふみに
も見えはンべればいにし比行て尋つれど所にもしれ
る人なくいたづらに歸りさふらひき、もしこころざ
しありなば、すぎやうにことよせて、彼あたりここ
かしこ日をかさねつつ、心をつくし求めなうば尋べ
しといひしかば、げにしか、しかはあれど、しぞき
て思ひめぐらせば、是凡慮をもてはかりしるべきこ
とにしもあらざりければ、享保十七壬子年二月三日
の夜よりはじめ、石山寺にこもりあて
石山やかたきころにいのりなば、なにかねがひの
かなはざるべき

西行入寂の地については西行と交りの深かつた藤原俊成

の書いた「長秋詠藻」という書物に「文治五年に西行が河内の弘川という山寺で患つてゐるとの事であつたから見舞の使者を走らせたところ、限りなくよろこんで病氣も大分よくなりつつあるからいづれ年の暮には京に上つてというていたのに果たされず、遂に年明けの二月十六日に亡くなつた云々。」ということが書かれている。似雲がその本を見る機會はなかつたのであるが、並河五一郎（註9）より示唆されたのである。しかし並河ほどの地理學者が調査したにもかかわらず弘川寺には見つからず空しく歸つてゐるのである。そこで似雲はこれは凡慮をもつてはかりしるべきことではないと思つて石山寺に參籠し、「晝夜不臥七日七夜丹誠を盡して祈願し」たところ、「不思議なるかな」中日にあたる二月六日の曉、心も疲れてどうしようもなくなり頭陀袋に臂をささえて少しばかりうとうとした時に、五位鶯一つ飛ぶと見え、笠をひるがえし待つてゐるとたちまちやつてきて、羽を休めたところで夢は跡なくさめてしまつた。似雲は是こそ觀音薩埵のおさとしであらうと思つたがその意味がわからないう。「猶妙智力をそへさせ給へ」としばらくの間念じてゐると、「五人立路鳥立竹」という一句を「夢かうつつか感得」した。よく考えてみると夢の五位鶯と笠という文字をへん、つくり、くつかぶりを分けてみるとこの一

句になる。更にこれから自分が尋ねて行くべき「山のたずまい、河の流れ、墓の有さま迄、まのあたりに見るがごとく」、「恐しくも、有がたくも、身の毛いよだちてそぞろ寒く涙とどめがた」かつた。參籠みちて似雲はすぐさま弘川寺をたずねたが、その日は奇しくも二月十六日、上人の正忌日であつた。彼は涙をおさえてこの度の弘川寺訪問の由を告げたが、人々は「この寺のほとりには思いもよらず」と答えるだけであつた。その時、年十五、六ばかりになる文教という僧「この上に行塚といふものあり、經塚を言ひあやまりし」と言つた。そのことばにハッと胸をうたれた似雲は「それこそ西行上人の古つかなれ、いひあやまれるにはあらず、西行塚といふべきを上略して行塚といひしものなり。」と斷定して直ちに行塚に赴いた。行く人の數は五人、しかも夢に見た有様と少しも違ふことなく古墳うずだかくしてその前には昔あつた西行上人の遺像堂の跡と思われ礎だけが残つていて哀深かつた。「いざいざこなたへ」と誘つて塚頭を見あげると、小竹が少し生え出している。「是ぞかねて言ひしに違はず」と指さして教えたところ、御告の通り鳥鳴きたちて虚空に飛び去つた。

是を見てわれはいふも更也、相ぐせしともがらも身を地になげうちて涙にむせかへり侍りぬ

尋えて袖になみだのかかるかな弘川寺にのこるふる
つか

さすが感動の深くこもつたこの歌は「としなみ草」中の
傑作であると言えよう。

古墳を發見したその翌年享保十七年（六十一歳）の二月
十六日にも似雲は墓に詣でてまた感涙にむせんでいる。

こぞのけふここに此古墳をたづねえしことを思
ひ出て

跡とひてことしもここにきさらぎやまた袖ぬらす望
月の比

一本の櫻をたづさへゆきてつかのほとりにうへ
侍るとて

一本もうへてさくらを手向ばやわが後世といひしし
るしに

折しもけさ齒一ツ落ければ是だにも結縁のため
にと植る木の本にそへてうづみはンベリしつづ
み侍に

西に行えにしもなれ古墳にうふるさくらもうづむ
おちばも

享保十九年（六十二歳）二月十六日には
行すゑのはるこそしらね尋えてみとせはつかに花た
てまつる

元文四年（六十七歳）二月十六日は西行の五百五十年忌
にあたるので南無阿彌陀佛の尊號を上においた六首の歌
を手向け、^{（註10）}「圓位上人古墳記」（円位は西行の法名）をまとめ
て弘川寺に奉納した。

以上西行塚發見の経緯と似雲の感動とについて考察し
たが、次いで注意させられることは、彼が六十八歳の時、
西行の

佛には櫻の花をたてまつれわが後の世を人とぶらは
ば

の意をうけて西行塚の周邊に櫻の樹千株を植えたことと
ある。それについて似雲は「種花記」（「としなみ草」卷
十八）という美しい文章を作つた。

七

西行塚發見は似雲一生の最も大きなよろこびであつた
が、これ以後の似雲の生活には、一段と徹底味が加わつ
ていつたようである。

元文五年（六十八歳）の冬より似雲はえにしのある弘川
寺のそばに草庵「花の庵」を結んだ。

圓位上人の古ことなシと思出て
なみならぬむかしの人の跡とひて弘川寺にすみぞめ
の袖

年明けて寶保元年の春をその草庵に迎えて、

水の音鐘のひびきも長閑にて弘川寺に春は來にけりと詠んだが、そのほかこの「花の庵」に住んでいたところの彼の歌を少しあげると、

須磨あかし窓より見えて住庵のうしろにつづくかつらぎの峰

弘川やけふささらぎの折にあひて涙さしぐむ花の木の本

弘川や流て西に行水もこし方人の跡したふらし

毎年二月十六日には西行追慕のころをこめた歌を獻じ、又七十二歳の二月十六日には西行堂を建立し弘川寺に傳わる西行像を安置した。

西へ行しみかけを堂にうつしいれて花奉るけふの嬉しさ

この頃西行を仰いで佛道、歌道の一如を實踐して行つた彼の心はいよいよ高まつて行つた。その年の四月十五日より七月二十七日までの一夏は葛城の草庵に扉をとじて禪關に入り、その間に毎首に「かつらぎ」を詠みこんだ「葛城山居百首和歌」をつくり一言主神社に奉納した。この「葛城百首」は似雲晩年の心情の豊かにあらわれた歌である。今その中から數首をひいてみると、

しもとゆふかつらぎ山に門とちてうき世をよそに心

やすめん

かつらぎやかゝる心も言のはも絶て身にしむ秋のゆふぐれ

かつらぎやよそめさやかに海見えていり日かがやく淡路しま山

西へ行えにしむすびて葛城やひろ川寺にすめばこそすめ

限りありて百日閉にし柴の戸もけふ開けるかつらぎの山

…最後の歌…

このほか彼は藝術的にも豊かな天分にめぐまれていた。その筆跡はうるわしく畫もまた巧みであつた。小夜の中山を越える西行の姿を描き「年たけて……」の歌を賛した一軸は眞に迫るかと思わせる位すぐれており、又同じく中山を越える自分の旅姿に、「立歸り……」の歌を賛したものもあり、風景を描いたものも風趣にとんでゐるし、阿彌陀尊像を描いた密畫や、更に自ら自分の像を刻したものも残つてゐる。

七十五歳の十二月ごろより和泉國^{つづの}尾の岡の北村六右衛門宅の境内にあつた常樂庵に住み、「としなみ草」末尾の第二十卷に自分の生涯を回顧して「思出草」をかいた。その終に「日毎に入日を拜みて老の身の思出とす、猶思出るに任せて、そこはかとなき和偈をつづりていは

…最初の歌…

く」と言つて詠んだ、

うけがたき人に生れし思出はみのりにあひぬる外は
なし

から始まり、

老らくのよるのねざめの思出はむねをさすりて何も
なし

何もみななし／＼の思出はなし／＼のなし
もなし

に終る歌四十首はその悠々自適、自ら高かつた宗教的心
境がよくあらわれている。

そして彼は自筆の「としなみ草」二十巻を、七十七歳
の二月十六日に弘川寺に奉納した。五十七歳の二月十六
日に髪を埋めて生葬し、心まことに西行を慕うことをあ
らわした彼はそれから二十年後の同じ日に生涯の歩みと
歌四千五百餘首とを自ら整理し清書した「としなみ草」
を西行のもとに捧げたのである。彼の生涯はまことに純
粹無雜の精神でつらぬかれ、よき志願をよく遂げ得たと
いえよう。彼はよく始ありよく終ある人であつた。

寶曆三年七月十八日八十一歳で常樂庵にて往生を遂げ
た。

(註1)

似雲法師についての研究は非常に少ないが、戸板短期
大學の秋末政次郎教授が、昭和12年から16年ごろの雑誌

似雲法師の生涯

「國の花」「雄山閣」「國學院雜誌」などに研究論文を
發表しておられる。

(註2)

「思出草」と殆ど同じ内容の文を母の五十回忌の時(似
雲五十七歳)に「手向草」として記しているが、それに
よれば臍の緒の包み紙にかきつけてあつた二首の歌のほ
かに瀧の歌を一首、人からきいて記している。更にその
母の瀧の歌の文字をよみこんだ長歌を作り母にたむけて
いるが、その文章も又感銘の深いもので一部紹介し
ておく、

亡母春月妙光大姉五十回忌も此春にめぐれり、され
ばこのみ給ひしことにはンベればそこはかとなき言
のほも、つづり手向なむと、とかく思ひめぐらしも
のすれども、何のよすがもなし、よめる歌、その世
にかいやりすてたまひて、有し歌とては、彼包紙に
のこさせ給ひしより外には、瀧の歌一首あり、此歌
はわれおさなき時、ゆかりある人々、ははを誘ひ、
すはうの國通づといふ所の山ふかくいりて魚きりと
きこへし瀧あり、是を見にまかり給ひて、此たきの
ほとりにおほきなる岩のはンベリつ、そのうへなる
苔をむしるに、みななみあて、つかみじかき筆な
ンどとうでてもにかきすぎ遊び給ひしこと、おほ
ろげなる夢のやうにおぼえはンベリければ、其ころ
わらはにてめしぐせしものありしかば、此事いか
にととひききてはンベリしに母の歌とて

瀧つせの岩にくだけちる玉はうき世の外のから
とぞ思ふ

といはほのさし出で、雨露のかからぬ所にかき給ひ
ければ、程經ても見へつれど、今はあとかたなくき
へうせぬとかたりはンベリし、もし今もその三十あ
まりの内、一もじにてもこのりなば、分いりて見て
ましものをと、袖をぬらしはンベリき、されば母も
山水を好みめでさせ給ひしよりうき世の外のから
とはよみ給ひけりと思へば、いとど涙は瀧に異なら
ず、さるに此遠忌にむかひて、この庵室をいとなみ
しことよ、所こそあれ戸灘瀧の瀧、龜の尾のたきの
しら玉もげにうき世のほかの寶とぞおもふにも、涙
の玉はちりそひぬ、彼瀧の歌の三十餘り二文字を、
句毎のかみ、末の句の終りにをきて、たむけたてま
つる長歌

たまゆらに しかたとをき つきも日も せ
につながれぬ のりのふね いそぢにめぐる
はるの月 にしにはるけき くなれど たむ
くる法の けふのには てらすも弘き ちかひ
にて るてんの雲 たちまちに まよひのきり
も はれにけり うれしさそひぬ きくたびに
よに超にける のりの聲 ほかにもとむる か
たぞなき のこるこの身を たらちねの かた
みとしれば らうもうも といはけなき そ

(註3)

のかみを おもひきえつつ もゆるかげろふ
と手向たてまつりて、半百の年思もすぎぬれば、世
にこころかかづらふ事露ばかりもなし(註7に續く)
「としなみ草」卷一、正徳五年(四十三歳) 四月二十
四日「流歌人二十人の中にまじつて「愛宕山法樂和歌」
を獻詠した時の彼の歌に「如雲後改似雲」という記名が
ある。その後享保二年(四十五歳) 武者小路家にて庭の
櫻を詠んだ時には「似雲」と明記

(註4)

森繁夫著「人物百談」によればある時師實陰と似雲と
の間に次のような問答があつたという。

實陰「そちは念佛三昧のために歌をやめることが出来る
か」。

似雲「歌を止める事は出来ません。念佛の助業に詠みた
ので、どうか歌の正道に出るやう稽句が致したい
のです」。

實陰「それはちと、成難い話であるが、まづ今の所では
歌をやめて、すなほに一枚起請の通りに、念佛の安
心を得らるるがよい。さうなれば自然歌の道も心安
く行はれる。萬首の歌を詠んでも、眞實安心でなけ
れば、歌の本筋に出ることはない。既に圓光大師は、
歌は後世のために如何と問はれた時、罪にもなり功
徳にもなると答へ、又遍照といふ題で、月影のいた
らぬ里はなけれども眺むる人の心にぞすむ、と詠ま
れた。法儀に心澄んでさへをれば、歌人でなくとも

かかる歌が詠めるではないか。

(註5)

「としなみ草」に實陰の名が初めて見えるのは、正徳三年、似雲四十一歳の歌である。

よしのの花を手折て武者小路家へ奉るとて
言のはの光をそへよ君がためたをるよしのの花の一

枝

武者小路前宰相實陰卿より御返し

折つるもさぞ奥ふかきころこそここによし野の花
を見せけれ

(註6)

「としなみ草」に西行の名が初めて見えるのは正徳三年、四十一歳の春、吉野へ行つた時

西行法師住給ひし苔清水の舊跡をとひ詣でて
苔清水すみにし人の心さへくみてしらるるみよしの
の奥

(註7)

又は、は、か、ら、さ、る、に、彼、花、の、本、に、て、春、死、な、ん、と、有、し、西、行、上、
人、の、忌、日、も、け、ふ、に、あ、た、れ、り、大、和、も、ろ、こ、し、世、捨、人、お、ほ、か、
る、中、に、此、上、人、を、わ、ぎ、て、と、し、頃、し、た、は、し、く、思、ひ、は、ン、ベ、リ、
き、や、つ、が、れ、も、あ、ら、か、じ、め、け、ふ、を、忌、日、と、さ、だ、め、を、ぎ、て、
い、ける、身、な、が、ら、な、ら、び、の、岡、の、か、た、は、ら、な、る、西、光、庵、に、て
葬、を、い、と、な、み、は、ン、ベ、リ、て、

我もけふ花の本にて先死なむ心の外に身は残るとも
なき跡にもしも辭世を人とはば南無阿彌陀佛／＼

享保十四己酉年二月十六日 似雲 無心 拜

(註8)

宗旨證文の事

似雲法師の生涯

(註9)

並河誠所ともいい、伊藤仁齋の弟子、「五畿内誌」の
著者。似雲は東國行脚の時、この誠所の三嶋の別亭であ
る富士見亭で元旦の富士を眺めた。

(註10)

なき人の遠きむかしになりにけり詞のはなは色もかは
らで

むなしとは思ひながらも花にそむ心のいろの誰かなから
あくがるる花の色香もしばしにてとまらぬものと山風ぞ

ふく
みちかへてまだ見ぬかたのよし野山花の枝折の跡やした

はむ
たがはずよかねて願ひの花の本げにきさらぎの望月の比

ふるつかを人とぶらはば五百年や五十のはるに花たてま
つれ

(註11)

「種花記」の後半のみをあげておく、
行末は春毎に花さきそひなば花見にとむれくる人おほか
るべしとうれしく思ひはンベリて、又思ひかへせば上人

享保十五年庚戌十月七日

山城國葛野郡御室池上

西 光 庵 印

の歌に、花見にとむれつつ人のくるのみぞあたらさくら
のとがには有ける、とよみ給へば末の世にいたりて、此
山のさか行まに、花のころ花の木陰にて、酒宴亂舞な
ンどもよほすともがらもありなば此寺の僧徒中よりかた
く制すべし、此山のさくらほもとより上人のふるつかへ
の手向なればそのころざしをわするべからず、又此後
建立修覆のことも、この山松のはしら草ふきにしたらひ
はンべらば、それこそ上人のころならめ、かならず美
麗を好むべからず、又寄付の器物もあやしく異やうなる
古物を、上人在世の時の御持物などいひなしてたむく
る人ありとも、是を用ゆべからず、さのごとく凡慮卑俗
のはからひにて、正風閑雅の上人を、後世あしざまにも
てなしはンべらば、ころあらむ人は、此寺の住侶のこ
ころざし迄淺はかに思ひ眉をひそむべし、又歌奉納の人
も言の葉をのみかぎり、心のまことなくして千首萬首手
向るとも上人のころにはうけ給ふまじ、たとひ樵夫牧
童うしの角もじもわきまへず、文字の教はあはずとも、
まことよりくちずさび、一えだの花もささげなばいかば
かり、上人は嬉しくうけたまひなむ、されば奉納の人の
みならず此てらの僧徒たちも、無欲清淨にして、奉納手
向の和歌をうけはンべらば、上人の心になひて、行末
は寺々も花とともにさかへなむ、もし御法のみにちなぞ
らへ歌のことによそへ、たからをえまほしく思ふともが
らもあらば上人のほいにたがふべし、むかし上人かまく

らにて、時の武將より白がねの猫をたまはりしに、をもく
うけて、かろくすて給ひしこと、思ひはかるべし、思ひは
かりて、上人のころざしにかなひなば、此寺の本尊藥
師如來、高祖弘法大師のみころにもそむかずして月々
年々にまねかざるに幸きたりて、この弘川寺行末ながく
絶ずさかへ榮なむことたなごころを見るがごとし
行すゑのかた見ともなれ弘川にけふかきながす水莖
のあと

元文五年卯月廿八日

釋似雲（花押）